【PRESS RELEASE】

泉屋博古館東京リニューアルオープン記念展Ⅱ

光陰礼讃

IN PRAISE OF LIGHTS AND SHADOWS

WESTERN PAINTING OF SUMITOMO COLLECTION

モネからはじまる住友洋画コレクション

2022 5.21 SAT → 7.31 SUN

[開館時間] 11:00～18:00 ＊金曜日は19:00まで開館 ＊入館は閉館の30分前まで

[休館日] 月曜日、7月19日(火) ＊7月18日(月・祝)は開館

[入館料] 一般1,000円(800円)、高大生600円(500円)、中学生以下無料

＊20名様以上の団体は( )内の割引料金。＊障がい者手帳ご呈示のかたはご本人および同伴者1名まで無料です。

[主催] 公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKUKOKAN TOKYO

上：クロード・モネ《モンソー公園》(部分) 1876年

下：ジャン＝ポール・ローランス《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》(部分) 1877年

2022.5.19更新

住友コレクションの一角を占める近代洋画は、住友吉左衛門友純（春翠）が明治30年(1897)の欧米視察中のパリで印象派の画家モネの油彩画2点を入手した事に始まります。このとき購入した西洋絵画などを、明治36年に完成した住友須磨別邸(洋館)に並べることになりますが、春翠は各部屋の用途や性格に応じた絵を飾っていくことを計画していきます。
収集の手立ての一つとしたのが、パリ留学を支援していた洋画家・鹿子木孟郎を仲介者としたことでした。鹿子木は当時パリ画壇で活躍する巨匠たちの名画を住友に届けたのでした。その中心は、ジャン=ポール・ローランスなどフランス・アカデミーの古典派の絵画です。19世紀末のフランス絵画は、印象派の台頭とともに古典的写実派が次第に衰退していく様相を示すことになりますが、住友洋画コレクションには同時代の印象派と古典派の作品がともに揃って収集されているところに特徴があります。

本展は、光を追い求めた印象派と陰影表現による実在感を追究した古典派を「光陰」と捉え、この「光陰」二つの流れから滋養を受けて展開した近代洋画の数々を、初公開の作品を含めて紹介するものです。
春翠が開いた洋画コレクションはその後、関西洋画壇をリードした浅井忠やその門下生たちの作品、また東京美術学校で学び、明治末から大正期にパリに留学して帰朝後に日本の洋画を切り拓いた青年画家たちの作品が順次加えられていきますが、その収集の遺志は春翠の子息たち（住友寛一と住友友成）に継承され、岸田劉生や、ピカソやルオー、また日本のフォーヴを担った画家たちの魅力ある絵画が継続的に住友家にもたらされたのです。

こうして集められた住友洋画コレクションを「光陰礼讃」と題し、近代絵画史の流れにそって紹介するものです。「光陰」とは本来「歳月」や「月日」の謂いですが、明治・大正・昭和という激動の時代を経て今に伝わる作品たちがくぐり抜けてきた歳月にも思いを馳せていただければ幸いです。

【本展のみどころ】

１．19世紀フランス絵画の光と陰

―印象派のモネと古典派ローランスの対決

２．初期文展の花形作家たちの代表作がずらり

―藤島武二、和田英作、岡田三郎助、山下新太郎、ほか

３.20世紀のパリと日本で活躍した画家たちの競演

―ルオー、ピカソ、シャガールと坂本繁二郎、岡鹿之助、小磯良平

【展示構成】

§１：光と影の時代―印象派と古典派

住友春翠の洋画コレクションの特色は、クロード・モネの2点の風景画をはじめとする印象派の作品と、それとは趣を異とする19世紀フランス・アカデミズムの写実表現を根幹とする古典派絵画が共に収められていることです。

その作品収集に深く関わったのが洋画家・鹿子木孟郎(かのこぎたけしろう)（1874～1941）です。明治30年代に渡欧した鹿子木の留学資金を支援する代わりとして、住友は鹿子木に西洋絵画の収集を依頼。パリで、アカデミズムの巨匠ジャン=ポール・ローランスの特別な弟子となった鹿子木は、ローランス作《ルターとその弟子たち》（第二次大戦中に焼失）をはじめ《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》などの代表作を春翠のもとに届けています。

鹿子木が仲介して集められた本場の西洋画には、他にフランス外光派や英国ロイヤル・アカデミーの画家たちの作品もあり、それらは明治36年に完成した須磨別邸の各部屋に飾られました。

クロード・モネ《モンソー公園》
1876年

ジャン=ポール・ローランス
《マルソー将軍の遺体の前の
オーストリアの参謀たち》　1877年

オーギュスト・ルノワール
《静物》　1905年頃

§２：関西美術院と太平洋画会の画家たち

前章で紹介した鹿子木孟郎が修得したのは、19世紀フランス古典派絵画の写実表現でした。留学中の鹿子木の鍛錬は、サロンに入選した《ノルマンディーの浜》に結実しています。帰国後、関西美術院や太平洋画会、文展(文部省美術展覧会)でも中心的存在となった鹿子木は、それらの展覧会出品作から春翠好みの洋画を仲介したり、また春翠が支援した関西美術院の院長だった浅井忠の遺作を住友に届けています。

太平洋画会は、浅井らを中心に明治20年代初期に創立された明治美術会を母体として明治34年（1901）に発足した美術団体。当初は鹿子木らが移入したアカデミックな写実画の牙城として、次章で紹介する白馬会系の外光表現と対照され、明治後期の洋画界における二大潮流を形成していました。

この章では、関西美術院を牽引した浅井や鹿子木の作品を中心に、明治美術会やその後の太平洋画会の系統を汲み、明治末の文展などで活躍した画家たちを紹介します。

浅井忠《河畔洋館》
1902年

鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》
1907年

渡辺與平《ネルのきもの》
1910年

§３：東京美術学校と官展の画家たち

「近代洋画の父」と呼ばれた黒田清輝は、明治中期のフランス留学中にラファエル・コランに学んだ外光表現を日本に将来しました。1893(明治26)年に帰国した黒田は、外光派表現の発表の場として「白馬会」を新たに結成し、また東京美術学校西洋画科の教諭となります。この黒田に師事し、後に同校教授となった藤島武二もまた、明治末にフランスに留学して古典的写実からポスト印象派まで幅広く学びました。

東京美術学校で黒田や藤島に学んだ和田栄作や岡田三郎助らは、明治30年代の白馬会を主な発表の舞台として外光表現を展開して、前章で紹介した明治美術会や太平洋画会の写実表現とは異なる新風を画壇に吹き込みました。彼らは、やはりフランス留学を経験して明治末に始まる文展でも受賞を重ね、一世を風靡しました。この章では、白馬会や文展で活躍した画家たちを紹介します。

藤島武二
《幸ある朝》
1908年

山下新太郎
《読書の後》
1908年

岡田三郎助
《五葉蔦》
1909年

§４：岸田劉生とその周辺

住友春翠の子息のひとり寛一(1896～1956)が、芸術に関心を深めるのは大正中頃のこと。洋画や文人画、仏画仏像、古筆や能面、そして中国絵画など、昭和戦前期まで精力的に収集した中で、とりわけ豊かな彩りを添えているのが、洋画家岸田劉生(1891～1929)との親しい交流です。

劉生から直接見せられたいくつかの麗子像の中から寛一が選んだのが、《二人麗子図（童女飾髪図）》です。劉生独自の審美観「デロリの美」や「卑近美」を統合したこの作品をはじめ、短いながらも生涯にわたる交流から質高い劉生の作品が住友に届けられたのです。

この章では、劉生の作品と劉生主導による草土社に参加した中川一政など、劉生周辺の画家たちを紹介します。

岸田劉生
《晩秋の霽日》
1917年

岸田劉生
《二人麗子図 （童女飾髪図）》
1922年

§５：２０世紀のパリと日本

春翠のもう一人の子息友成（1909～93）の洋画収集が本格化するのは、1930年代から40年代前半に集中しています。昭和戦前戦中にあたるこの時期は、第一次大戦後から第二次大戦前までにヨーロッパで学んだ洋画家たちが20世紀前期のパリ画壇を席捲したキュビスムやフォーヴィスムを盛んに移入した時代です。とりわけ、フォーヴィスムに傾倒した画家達が集まった二科展や独立美術協会などは、実に多様な個性を成熟させる自由な場でした。主観を押し出した彼らの作品は、東洋的な線質を生かしたり、フォルムの単純化や様式化を促しました。それらは伝統的な日本絵画にも通ずる要素でもあったので、彼らの芸術は「日本的フォーヴ」と呼ばれるようになり、梅原龍三郎らによる「日本的油絵」とともに、昭和期の洋画の主流となりました。

この章では、ルオーやピカソ、あるいはシャガールといった20世紀フランスの画家達と彼らから影響を受けた日本の洋画家たちを紹介します。

ジョルジュ・ルオー
《曲馬団の娘たち》
1924～25年

パブロ・ピカソ《泉》
1921年

マルク・シャガール
《山羊のいる自画像》　1958年

中川紀元 《少女》
1936年

熊岡美彦 《ミモザ》
1929年頃

岡鹿之助《三色スミレ》
1977年

坂本繁二郎《箱》
1961年

熊谷守一《野草》
1972年

特集展示：「住友建築と洋画ー洋館には洋画がよく似合う」

住友春翠は、幕末に右大臣などを務めた公卿・徳大寺公純の五男として京都に生まれ、見込まれて住友家の養嗣子として入家、1893（明治26）年30歳で当主となりました。その春翠が、神戸の西に位置する風光明媚な須磨の地を手に入たのは、同じ明治26年のこと。まもなく彼の地に別邸建設を企図して、それが「須磨別邸」という洋館として実現したのは1903(明治36)年のことです。

春翠が須磨別邸内部に飾る絵画として洋画収集に力を注ぐ契機となったのが、1897(明治30)年の欧米視察旅行でした。パリで購入したクロード・モネの作品をはじめ、青年洋画家・鹿子木孟郎にフランス留学の資金を提供する代わりに本場の西洋絵画の斡旋を依頼するなどして収集された西洋絵画コレクションは、日本の洋画コレクションの先駆けとも目されました。

景観模型工房《住友家須磨別邸模型》
2015年

河久保正名《海岸燈台之図》
1902年

《会期中のイベント》

●特別講演会「住友春翠と建築家・野口孫市たち」

6月24日(金)　17:00～18:30（要事前申込・要観覧券）

〔講師〕林和久氏（工学博士）

●特別講演会「知られざる蒐集 ― 住友洋画コレクションの特質」

7月16日（土）14:00～15:30（申込受付終了・要観覧券）

〔登壇者〕三浦篤氏（東京大学総合文化研究科教授、美術史家）

●スライド・レクチャー「詳しすぎる作品解説」

6月24日を除く、会期中毎週金曜日17:00～18:00　＊7/15のみ17:30開始

〔講師〕野地耕一郎（泉屋博古館東京・館長）

《基本情報》

展覧会名　泉屋博古館東京リニューアルオープン記念展 II

光陰礼讃　モネからはじまる住友洋画コレクション

Grand Reopening Exhibition II

In Praise of Lights and Shadows ― Western Painting of Sumitomo Collection

会　　期　2022年5月21日（土）～7月31日（日）（62日間）

開館時間　11:00～18:00　※金曜日は19:00まで開館　※入館は閉館の30分前まで

休 館 日　月曜日　※7月18日(月)は開館、翌19日休館。

入 館 料　一般1,000円（800円）、高大生600円（500円）、中学生以下無料

※20名様以上の団体は（　）内の割引料金

※障がい者手帳ご呈示の方はご本人および同伴者１名まで無料

会　　場　泉屋博古館東京　〒106-0032　東京都港区六本木1-5-1

https://sen-oku.or.jp/tokyo/

TEL:050-5541-8600（ハローダイヤル）

主　　催　公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

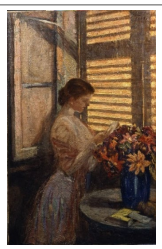
《お問い合わせ》

泉屋博古館東京　広報担当：橋本旦子、担当学芸員：野地耕一郎）

TEL：03-3584-8136　FAX：03-3584-8137 E-mail：pr-tokyo@sen-oku.or.jp

泉屋博古館は、住友コレクションをはじめとした美術品を保存、研究、公開する美術館です。
所蔵品は中国古代青銅器をはじめ、中国・日本書画、西洋絵画、近代陶磁器、茶道具、文房具、さらには能面・能装束など幅広い分野にわたり、現在は3,500点（国宝２件、重文19件、重要美術品60件を含む）にのぼります。当館事業の趣旨に賛同する住友グループ各社の支援のもと、京都・東京それぞれ地域の特性も活かしながら展覧会を開催し、当館の魅力を発信しています。

《貸出可能画像一覧》

	クロード・モネ《モンソー公園》 1876年 Claude Monet　Monceau Park 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス 56.0×69.5
	ジャン＝ポール・ローランス 《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》 1877年 Jean-Paul Laurens　Autrian army staff by General Marceau's body 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス　210.0×300.0(cm)
	藤島武二 《幸ある朝》　1908年 Fujishima Takeji　Felicitous Morning 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス 148.5×93.5(cm)
	オーギュスト・ルノワール 《静物》1905年頃 Pierre-Auguste Renoir　Nature Morte 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス 24.0×33.2(cm)
	鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》1907年 Kanokogi Takeshiro　Beach in Normandy 油彩・キャンバス 164.0×219.0(cm)
	浅井忠《河畔洋館》　1902年 Asai Chu　Old Castle by the River 泉屋博古館東京 水彩・紙 44.7×27.7(cm)
	岡田三郎助 《五葉蔦》1909年 Okada Saburosuke　Virginia Creeper 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス 58.0×48.5(cm)
	岸田劉生《二人麗子図 （童女飾髪図）》 1922年 Kishida Ryusei　Two Reikos (Little Girls fixing Their Hair) 泉屋博古館東京 油彩・キャンバス 100.3×80.3 (cm)

当展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。ご希望の図版に☑を記し、用紙を FAX またはメール添付にて返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階でお知らせください。お貸し出しする画像データは各展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を 1 点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書下部の所定の欄に招待券希望の旨を明記して下さい。

掲載に関するお問い合わせ先：泉屋博古館東京　（担当：橋本　pr-tokyo@sen-oku.or.jp）
TEL.03(3584)8136　FAX.03(3584)8137　https://sen-oku.or.jp/tokyo/

掲載・画像貸出申込書　(FAX：03-3584-8137)

●貴社基本情報

会社名：	
担当部署	担当者名：
住所：〒	
電話：	ファックス：
E-MAIL：	

●媒体情報

新聞	媒体名：	
雑誌	発行日：	発売日：
TV	媒体名：	
ラジオ	放送日：	放送時間：
ネット	URL：	

●画像貸出リスト　※キャプションには作家名／作品名／制作年代／所蔵先を必ず入れてください。

希望作品に☑	画像 No.	作家名・作品名	制作年代	所蔵
□	1	クロード・モネ《モンソー公園》	1876 年	泉屋博古館東京
□	2	ジャン＝ポール・ローランス《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》	1877 年	泉屋博古館東京
□	3	藤島武二《幸ある朝》	1908 年	泉屋博古館東京
□	4	鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》	1907 年	
□	5	オーギュスト・ルノワール《静物》	1905 年頃	泉屋博古館東京
□	6	浅井忠《河畔洋館》	1902 年	泉屋博古館東京
□	7	岡田三郎助《五葉蔦》	1909 年	泉屋博古館東京
□	8	岸田劉生《二人麗子図（童女飾髪図）》	1922 年	泉屋博古館東京

●読者プレゼント用チケット希望：　□５組１０名様　□１０組２０名様